

新年度に向けて

3学期はまだ途中ですが、新年度に向けての教材や教具の準備はすでにはじまっています。図書の購入計画、児童が一人一人使う教材の選択作業などの重要性は言うまでもありません。ノートやドリル・問題集などについても、本年度の経験から継続したり、新たなものを選んだりすることになります。

農大稲花小は新しい学校です。今までと同じでよい、という考え方は通用しません。適切な教材・教具と認められれば次年度・次学年でも受け継いでいく一方、本校の教育や児童には合わないと判断すれば、これは潔く変更していきます。さらに、学年進行によって必要な物品も変わっていきます。例えば、タブレットです。本校では学年で利用するタブレットを備え付けており、1年生から授業などでも活用しています。しかし、低学年においては、まず、鉛筆を使って字をきちんと書いたり、ノートを整えたり、あるいは図書室の本で調べたりすることが一番大切だと考えています。授業でタブレットに向かうよりまずは、友だちや先生と向かい合ってコミュニケーションできるようになってほしいとも願っています。逆に4年生以上になれば、能動的にタブレットを活用する力もついてきますし、調べ学習なども多く行われますので、学校でも自宅でもタブレットは大活躍しそうです。そうなれば、タブレットを個人で持つことも必要になるのです。

新年度に向かって、子どもたちの表情や農大稲花小らしい授業の様子を思い浮かべながらの教材・教具の準備は、今日も進められています。

紐靴は難しい？

本校では、3年生以上になり、足のサイズが21cm以上になった児童は、校内履きを紐靴タイプに変えることになっています。これは足をしっかり支えることにより、体育館などでの激しい運動が安全に行えるようにすることが目的です。

とはいえ、3年生を見ていると紐靴の紐を結ぶのに苦戦している子どもたちが少なくありません。ちょうちょ結びができないわけではないのですが、急ぐ気持ちがあるのかもしれませんが、だらしなく結んでいても気にならないのかもしれませんが、しかし、きちんと結べている子どもはちゃんといいます。家庭で練習してきた子どももいます。中には、結びやすい長さの紐に取り換えたりするなど、工夫している子どももいるのです。そういう様子を見ると、子どものことをよく見て、考えておられるご家庭に違いないとうれしい気持ちになります。

入学時に、すべての持ち物に記名したことを思い出していただけたらと思います。親子でうれしい気持ち、誇らしい気持ちで記名した鉛筆、ノート、教科書、制服、靴をご覧になったことでしょう。しかし、学年が進むにつれてそのような気持ちは薄れがちです。毎週持ち帰る運動靴だけではありません。様々な持ち物の管理を任せっぱなしにするのはまだ早いという子どもは多いのです。小学生の間は、持ち物の記名をはじめ、数は足りているか、壊れたり痛んだりしていないか、あまりにも汚れたままになっていないか、などを子どもとともに確認していただければと思います。学校での指導に加えて、ご家庭での見守りによって、モノを大切に、正しく使える子どもが育っていくと考えています。

高知県から

2月24日(木)、1年生は食育ミニ講義の一環として、文旦(土佐文旦)について学びました。2年目になる先生役は、高知県土佐市地域おこし協力隊として活躍する水谷氏。世田谷育ち、東京農大・大学院の卒業生ですが、就農して文旦農家となりました。教室の子どもたちと文旦畑の水田氏をZoomで結んでの授業です。子どもたちは文旦の大きさや、山の斜面で収穫した文旦を運ぶモノレールに興味津々でした。1本の木に120個ほどの文旦が実るそうです。文旦が熟する前は何か色ですか という中々良い質問もあり、水谷氏からはすぐに未熟果の画像を送っていただきました。また、現地で無人販売されている文旦の画像には、「泥棒はいないのかな」と心配する声も。無人販売を良心市と呼ぶこと、良心というのは誰もが心にもっている良いことをしようとする気持ちのことだと説明すると、誰もが納得した表情を見せていました。

文旦の厚い皮をむくためのプラスチックピーラーとともに、子どもたちは大きな文旦を一つずつプレゼントしていただき、ランドセルに入れて持ち帰りました。ご家庭でも文旦について話が弾んだことかと思えます。文旦の甘さやさわやかな酸味とともに、子どもたちの学んできたことをご家庭でしっかり掬い取っていただくことを期待しています。



◆土佐市地域おこし協力隊：<https://www.facebook.com/tosacity.kyouryokutai/>

◆高知まるごとネット：<https://kochi-marugoto.com/goods/cg3/136/>

校長 夏秋 啓子